

2024年4月7日 第1主日礼拝 午前10時

聖書 ハガイ1章1-11節 説教 「第一に求めるもの」

今日から久しぶりに旧約聖書からの説教となります。今回は旧約聖書の最後の3つの書物ハガイ、ゼカリヤ、マラキを順番に見ていきます。3つともバビロン捕囚の後の出来事を取り扱っています。イスラエルの歴史を見ると、前586年にバビロンによって南ユダ王国が滅ぼされ、民はバビロンに捕囚の民となって連れて行かれました。これがバビロン捕囚です。その後、バビロンはペルシアによって滅ぼされ、ペルシアのキュロス王が即位しました。彼は前538年にバビロンにいるユダヤ人に、ユダヤに帰ってエルサレム神殿を再建することを許可しました。最初に帰還した約5万人の民は、翌年から神殿再建工事に取り掛かりますが、周りの異邦人の妨害を受けて、工事は長らく中断してしまいます。それから約18年後の前520年、神は預言者ハガイとゼカリヤを遣わして、中断している神殿工事を再開し、神殿を建てるように民を励ました。神殿工事についてはエズラ記1~6章にも記されています。なお、エズラ7章以降とネヘミヤ記の城壁再建の出来事は、ハガイとゼカリヤの神殿再建の後の出来事となります。ハガイ書にはハガイの4つの預言が記されています。今日は1回目の預言の前半ハガイ1:1-11から「第一に求めるもの」と題して3つの点のみことばを取り次ぎます。

1. 自分を第一とする生き方 1-4

預言者ハガイに主のことばがあったのは、ペルシアの王ダレイオスの第二年、第六の月の一日でした。これは前520年の8~9月です。その時のユダの総督はゼルバベルです。ゼルバベルはシュアルティエルの子、シュアルティエルはバビロンに連れて行かれた南ユダの王エホヤキン、別名エコンヤの子です。ですからゼルバベルはダビデ王家の子孫であり、彼らの名前はマタイ1章のイエスの系図に載っています。またその時の大祭司はヨシュアです。ゼルバベルもヨシュアも最初にバビロンからエルサレムに戻って来た人たちです。預言者ハガイは、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアに主のことばを伝えました。

「2万軍の主はこう言われる。『この民は「時はまだ来ていない。主の宮を建てる時は」と言っている。』」最初のユダヤ人がエルサレムに戻ってすでに18年が経っていました。彼らは神殿再建工事を始めましたが、周りの民の妨害にあい、工事は中断し長い年月が過ぎていました。長い間神殿が廃墟となっていたにも関わらず、民は「時はまだ来ていない。主の宮を建てる時は」と言っていたのです。ここにユダヤの民の第1の誤りを見ることができます。それは神の時、神のみこころを誤って理解したことです。彼らはユダヤ帰還後、何も無い所で一から生活していかなければなりません。生活再建をしながら、神殿再建工事を行いました。そして神殿再建を始めると周りの民の反対にあい、工事を中断してしまいました。それから18年経っても彼らは「神殿を建てる時はまだ来ていない」と言い続けたのです。しかしそれは間違っていました。神殿再建の時はすでに来ており、神のみこころは彼らが神殿工事を再開することでした。彼らは自分たちの思いをもって、神の時と神のみこころを解釈した結果、神の時とみこころを間違えて理解したのです。

もう一つハガイが指摘した民の誤りがあります。それは自分を第一とする生き方です。3-4「3すると預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。4『この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住む時だろうか。』」民にとって自分たちの生活も大切です。しかしこの時の民は、神のことを顧みず、自分たちの生活のことだけに力を注いでいたのです。その結果、神殿は廃墟のまま、自分たちは板張りの家を建てて住んでいたのです。もちろん、板張りの家に住むことが悪いことではありません。問題は「この宮が廃墟となっているのに」ということです。彼らは神の民であり、長いバビロン捕囚からようやく解放され、エルサレムに戻ることができました。これは神の救いの御業であり、彼らは神のあわれみと恵みを特別に経験したのです。ですから、その感謝をもってエルサレムに再び神殿を建て、神を礼拝し、神を中心とした生活を再建することこそ、神の民としてふさわしいことでした。ところがこの時彼らがしていたのは、神中心、神第一の生き方ではなく、自分中心、自分第一の生き方でした。その生き方が、神の時、神のみこころを間違えて理解することにつながりました。

私たちが気を付けなければ、この時のユダヤの民と同じ誤りに陥ることになりかねません。自分の願い、自分の思い、自分の置かれた状況、周りの状況を中心に考えると、神の時と神のみこころを正しく知ることができなくなります。また自分の生活に忙しくし、自分の生活を第一にして生きる結果、神のことをわきに置いて生活することが起こります。そうすると、神が私たちを通してなそうとしておられることを見失い、行わなくなるのです。そのようにならないためにはどうしたらよいでしょうか。ハガイのことばに引き続き耳を傾けましょう。

2. 自分を第一とする生き方の結果 5-6、9-11

ハガイは民が神の時とみこころを理解せず、自分を第一とする生き方をした結果どうなったかを教えます。「5今、万軍の主はこう言われる。『あなたがたの歩みをよく考えよ。』」「あなたがたの歩み」とは、今までの自分たちの生活のことです。神のことをわきに置き、自分のことを第一にした生活はどうであったかをよく考えよと神は言われました。「6多くの種を蒔いても収穫はわずか。食べても満ち足りることがなく、飲んでも酔うことがなく、衣を着ても温まることがない。金を稼ぐ者が稼いでも、穴の開いた袋に入れるだけ。」一生懸命働いても、十分な収穫を得ることができず、食べても飲ん

でも衣を着ても、心が満ちたり心温まることがなかったのです。

9-11「9 あなたがたは多くを期待したが、見よ、得た物はわずか。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。一万軍の主のことば—それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがそれぞれ、自分の家のために走り回っていたからだ。10 それゆえ、あなたがたゆえに、天は露を滴らすのをやめ、地はその産物を出すのをやめた。11 わたしはまた、日照りを呼び寄せた。地にも山々にも、穀物にも新しいぶどう酒にも油にも、地が産み出す物にも、また人にも家畜にも、手によるすべての労苦の実にも。」

神は、主の宮が廃墟のままなのに長年そのままにして、自分の家のために走り回る民に、自然界を通してその誤りを教えました。イスラエルはもともと乾季には雨がほとんど降りません。その代わり朝になると朝露が降りて作物に水分を与えます。その朝露の滴りを神は止められました。さらに神は雨季にも日照りを呼び寄せられ、まとまった雨が降りませんでした。その結果、十分な収穫ができないようにされたのです。それが神に頼らず、自分たちの力で自分たちの生活を第一にして生きて来た結果でした。神はなぜそのようなようになったのかを考えよと民に語られたのです。そして、その答えを9節で神は言われました。「それはなぜか。一万軍の主のことば—それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがそれぞれ、自分の家のために走り回っていたからだ。」

神は私たちにも問題に直面させることを通して、「あなたがたの歩みをよく考えよ」と言われて、方向転換を迫られることがあります。世の光紙3月号の救いの証しの欄に、中学校の教員の方の証しが載っていました。大学生の時に洗礼を受けたその人は学校の教師になり、教会では役員もされました。しかしその後忙しさや他の理由で教会に年数回程度しか行かない生活が10年ほど続きました。ところが昨年仕事上のミスが続き、保護者との間でトラブルが発生したのです。そんなこともあり、彼は教会に行こうと決心し、教会に出席しました。そのときのメッセージを聞いて、これは偶然に起きたミスではなく、神に招かれて教会に来ることができたのだと実感したと証ししておられます。神は今も私たちが直面する様々な出来事を通して「あなたがたの歩みをよく考えよ」と言われ、神のもとに戻るように私たちが招いておられます。

3. 神を第一とする生き方 7-8

神は、自分を第一とする生き方をしている民に対して、神を第一とする生き方をするように語られました。7-8「7万軍の主はこう言われる。『あなたがたの歩みをよく考えよ。8山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、栄光を現す。—主は言われる—』」神は再び「あなたがたの歩みをよく考えよ」と言って、これから民がなすべき神のみこころを教えられました。それは神殿工事を再開することです。民は神殿を建てる時はまだ来ていないと言っていました。神はその時はすでに来ていると言われました。ですから今すべきことは、山に登り、木を運んで来て、宮を建てることです。それが捕囚から帰って来た民にとって、神を第一とする生き方でした。そして神は、神を第一とする生き方に彼らが方向転換すれば、「わたしはそれを喜び、栄光を現す」と言われました。神は民が神殿を建てることを喜ばれます。なぜならそれが神のみこころだからです。神は人が神のみこころを行うことを喜ばれます。そして、人が神のみこころを行うなら、神はご自分の栄光を現されます。そして、やがて神殿が完成し、民がそこで神を礼拝する時、神はご自分の栄光を現してくださるのです。

イエスはマタイ6:33で言われました。「33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」神は私たちの生活の必要を知っておられます。私たちにいのちを与え、今日も生かして下さっている神は、私たちが生きるために必要なものを与えてくださる神です。ですからイエスは「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」と教えられたのです。私たちが神を第一とする生活をするならば、神が私たちの歩みを喜ばれ、私たちを通して神の栄光を現して下さり、私たちの必要も神が満たして下さるのです。

エルサレムに帰還したユダヤ人は、バビロン捕囚から解放され、神の大いなる救いを経験しました。彼らにとって神の救いに感謝し、神を第一とする生活とは、神殿を再建し、神に感謝の礼拝を献げることでした。私たちはイエスによって罪の奴隷から解放され、永遠のいのちの救いをいただきました。私たちもイエスの救いに感謝し、神を第一とする生活をするとき、神は私たちを通して栄光を現して下さいます。

私たちにとって、今、神が求められる神を第一とする生活はそれぞれ違うことでしょう。先ほどの証しの中学教師にとっては、教会生活を再開することでした。ある人にとっては毎日個人ディポジションを持つことかもしれません。どんなに忙しくてもまず神の前に静まり、聖書を開き祈りの時を持つことは、神を第一とする生活の基礎となります。またある人は、神の時、神のみこころをよく考え、よく祈って、みこころの従う道を選び取ることもかもしれません。新年度になり、私たち一人ひとりも教会にとっても新たな歩みが始まりました。私たちはそれぞれ自分を第一とする生き方ではなく、神を第一とする生き方に進んでいきましょう。神はそのような生き方を喜び、ご自分の栄光を私たちを通して現わして下さいます。